

2023年度成人科テキスト

「聖書日課と分かち合い」 11月号



名前

お知らせ

◇ 毎週、成人科を行っています。ぜひご出席ください。

10:15～10:50 地下フェロシップホールにて

◇ 受付で出席表に記入し、グループ分けの番号札を引いてから着席ください。

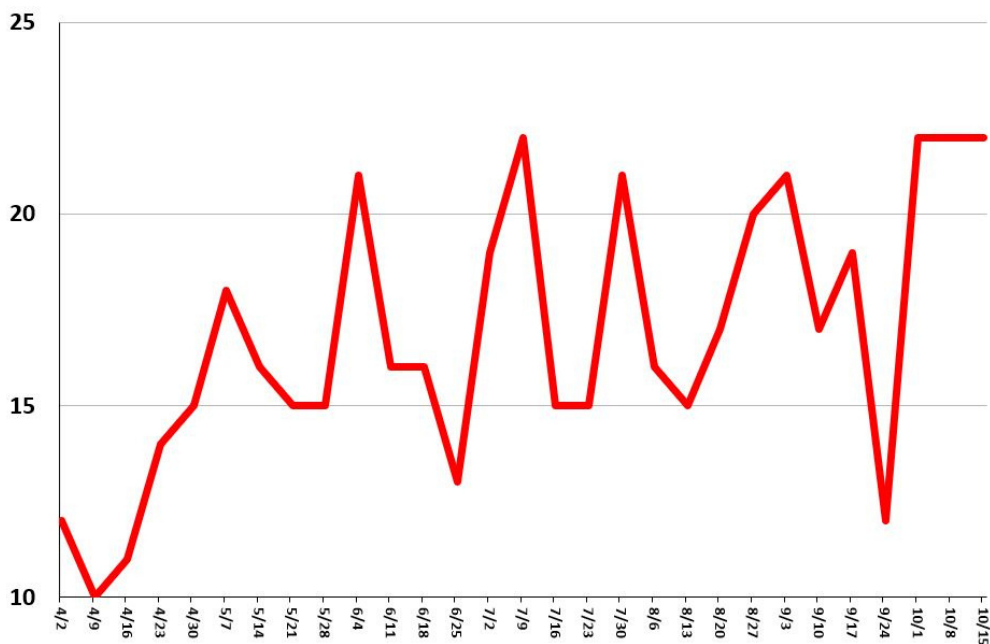
◇ 後から来られる方のために、前列への着席にご協力をお願い致します。

◇ 「聖書教育」誌の購読をお勧めしています。このテキストと併せて、ぜひお読みください。ご希望の方は事務室までお知らせください。

◇ このテキストのボックスへの配布をご希望される方は、担当者（岩崎秀子姉、宇佐美典子姉、郷健人兄）までお知らせください。

◇ ショートメッセージ動画は教会ホームページ上でも視聴できます。10:15のスタートには間に合わない・・・という方や、お休みされた方、もう一度聞きたいと思われる方など、ぜひご活用ください。

学びの輪を広げましょう！



礼拝と学びがバプテスト教会の二本柱。

テキストをお読みくださっている皆様も、ぜひ毎週日曜10:15～の成人科にご出席ください！

今月の執筆者

(左:ショートメッセージ 右:聖書日課)

32課: 田中由記子姉 宇佐美典子姉

33課: 郷 健人兄 栗山義亜兄

34課: 岩崎秀子姉 渡部和子姉

35課: 郷 秀男兄 工藤征治兄

第32課 「主の選んだ僕」

聖書箇所：イザヤ書42章1～9節

主題聖句：主であるわたしは、恵みをもってあなたを呼び/あなたの手を取った。
民の契約、諸国の光として/あなたを形づくり、あなたを立てた。

10月からイザヤ書を読んでいます。1週目から4週目までは第一イザヤと呼ばれる個所でした。10月29日の第31課より、第二イザヤと呼ばれる個所に入っています。そして、11月の成人科では第二イザヤが残した4つの詩から学びます。

本日の42章は「主の僕の召命」です。

バビロン捕囚により、イスラエルを離れ、不自由な生活を強いられていた人々に、解放の希望を語り、救い主が来られることを告げます。「僕」と呼ばれる、その救い主は主イエス・キリストです。

マタイによる福音書12章17節から21節に次のように書かれています。

それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。

「見よ、わたしの選んだ僕
わたしの心に適った愛する者。
この僕にわたしの霊を授ける。
彼は異邦人に正義を知らせる。
彼は争わず、叫ばず、
その声を聴く者は大通りにはいない。
正義を勝利に導くまで、
彼は傷ついた葦を折らず、
くすぶる灯心を消さない。
異邦人は彼の名に望みをかける。」

イエスさまがお生まれになる700年も前に預言されていたのです。

救い主イエスさまは、神が喜んで選び、霊を注がれた方で、罪の中にある国々を裁き、闇の中に沈み、苦しんでいる人々を救ってくださるお方です。しかし、その方は、強く、大きい方ではなく、自分の力を誇示するような方でもありません。力で相手をねじ伏せたり、言うことを聞かせたりしません。

自分の力ではなく、神の力により頼み、神の愛と義によって、この世界が公正なものとなるようにお働きになるのです。

「傷ついた葦を折ることなく 暗くなってゆく灯心を消すことなく」（3節）とあります。傷ついてしまった葦を価値のないもの、取るに足らないものとして、踏みつぶして歩いていく…イエスさまはそのようなことは決してなさいません。炎が消えてしまいそうな灯心に対しても、決してあきらめることなく、再び火をともしることができるように、命を吹き込んでくださるのです。

傷ついて、うずくまっている小さな私たちを捨て置かず、神さまから離れ、信仰を失いそうになっている弱い私たちのことを決してあきらめず、私たちが神さまの栄光の下、歩いていくことができるよう、救い出してください。主の僕は、神の正義をもって、必ずこの世界を救ってくださるので、私たちは傷つき果てることも、暗くなってしまうこともないのです。

話は少しそれますが、ある教会員の方の息子さんのお名前は、この「灯心」に由来していると伺いました。これからの人生の中で、様々なことを経験し、落ち込むこと、気持ちが暗くなることがあるでしょう。神さまから、教会から離れてしまうこともあるかもしれません。しかし、神さまは決してあきらめないお方です。途切れることなく注がれる神さまの愛と力を受けて、神さまを信じる心を燃やし続け、主のみ心に従って歩む人になってくれることを願います。

5節から7節を見てみましょう。

天と地を造られ、人間に命の息と霊を吹き込まれた神が、主の僕を送ってくださると書かれています。見ることのできない目を開き、捕らわれ人をその枷から、闇に住む人をその牢獄から救い出すためです。霊的に、社会的に捕らわれた人々をその闇から解放してくださるのです。

この箇所はイエスさまが初めて故郷ナザレで伝道を始められたときに引用された箇所でもあります。

イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある箇所が目にとまった。

「主の霊がわたしの上におられる。
貧しい人に預言を告げ知らせるために、
主がわたしに油を注がれたからである。
主がわたしを遣わされたのは、
捕らわれている人に解放を、
目の見えない人に視力の回復を告げ、
圧迫されている人を自由にし、
主の恵みの年を告げるためである。」

～中略～

そこでイエスは、「この書物の言葉は、今日、あなた方が耳にしたとき実現した」と話し始められた。（ルカ4章16～19節）

神さまの大きな計画に驚くばかりです。

神さまは、ご自身が主であると、私たちに教えてくださっています。主の栄光は完全なもので、他のものにとって代わられることはありません。偶像を拜んでも、主の栄光にはあずかれません。むなしだけです。

見よ、初めのことは成就した。（9節）

預言は、「こういうことが起こるでしょう」ではなく、「すでに成就している」と語られます。力強い言葉です。

ここに書かれている主の僕はイエスさまですが、私たちも主の僕です。主に名前を呼ばれて、集められ、喜んで迎えられ、霊を注がれたのです。そのことに感謝して、主の公正の実現のために、自分にできることは何か、主に祈り求めつつ、主にお仕えしてまいりましょう。

～分かち合い～

- この預言を聞いた当時の人々はどのように思ったのでしょうか？
- 自分を選び、喜んで迎え、霊を注いでくださる主の存在を感じたことはありますか？その時、それにどのように応えたいと思いましたか？

11月5日（日）イザヤ書42章1-9節

1見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。
わたしが選び、喜び迎える者を。

彼の上にわたしの霊は置かれ
彼は国々の裁きを導き出す。

2彼は叫ばず、呼ばわらず、声を巷に
響かせない。

3傷ついた葦を折ることなく
暗くなってゆく灯心を消すことなく
裁きを導き出して、確かなものとする。

4暗くなることも、傷つき果てることもない
この地に裁きを置くときまでは。
島々は彼の教えを待ち望む。

5主である神はこう言われる。
神は天を創造して、これを広げ
地とそこに生ずるものを繰り広げ

その上に住む人々に息を与え
そこを歩く者に霊を与えられる。
6主であるわたしは、恵みをもってあなたを
呼びあなたの手を取った。

民の契約、諸国の光として
あなたを形づくり、あなたを立てた。

7見ることのできない目を開き
捕らわれ人をその枷から
闇に住む人をその牢獄から救い出すために。

8わたしは主、これがわたしの名。
わたしは栄光をほかの神に渡さず
わたしの栄誉を偶像に与えることはしない。

9見よ、初めのことは成就した。
新しいことをわたしは告げよう。

それが芽生えてくる前に
わたしはあなたたちにそれを聞かせよう。

傷つき今にも折れて枯れてしまいそうな葦、もはや注ぎ足す油がなく消えてしまいそうなランプ。どちらも弱々しく貧しい人を表しています。僕（しもべ）はこのような弱者と共にいて、自らは愛の灯芯を灯し続け人々を照らします。自ら僕となり弟子の足を洗う主イエスさまのお姿と重なります。

11月6日（月）使徒言行録42章1-9節

1さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、2ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。3ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。4サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。5「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。6起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」

みなさんはユリの花言葉を知っていますか？諸説ありますが有名なものは純粹（Purity）と威厳（Majesty）です。気高くまっすぐで威厳のあるイエスさまが私たちの信仰の目を開いてくださいます。そんな復活の主に出会ったパウロが今までは全く違う生き方を選びます。パウロは純粹にイエスに従い、大胆に福音を宣べ伝える伝道者へと変えられたのです。

11月7日（火）マルコによる福音書1章16-20節

16イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。17イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。18二人はすぐに網を捨てて従った。19また、少し進んで、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、20すぐに彼らをお呼びになった。この二人も父ゼベダイを雇い人たちと一緒に舟に残して、イエスの後について行った。

4人の弟子たちは、家族や生活などの心配事すべてを主に委ねて、招きに「すぐに」従いました。その決断はとても大切です。漁師としての経験を神の国のために用いるよう「人間をとる漁師」へと導かれます。主のお働きに加わり、世界中の人々が福音の喜びに与れるよう宣べ伝える僕になりたいです。

11月8日（水）コロサイの信徒への手紙 | 章24－29節

24今やわたしは、あなたがたのために苦しむことを喜びとし、キリストの体である教会のために、キリストの苦しみの欠けたところを身をもって満たしています。25神は御言葉をあなたがたに余すところなく伝えるという務めをわたしにお与えになり、この務めのために、わたしは教会に仕える者となりました。26世の初めから代々にわたって隠されていた、秘められた計画が、今や、神の聖なる者たちに明らかにされたのです。27この秘められた計画が異邦人にとってどれほど栄光に満ちたものであるかを、神は彼らに知らせようとされました。その計画とは、あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望です。28このキリストを、わたしたちは宣べ伝えており、すべての人がキリストに結ばれて完全な者となるように、知恵を尽くしてすべての人を諭し、教えています。29このために、わたしは労苦しており、わたしの内に力強く働く、キリストの力によって闘っています。

弱さや恐れを覚えるとき、主イエスのみ力に依り頼みます。すべてをご存じの主が私たちを慰め、立ち上がらせ、導いてくださいます。主の名によって集められた私たちが祈りと「内に働くキリストの力」1:29によって教会を建て上げ、たとえ労苦があったとしても、真の喜びの中を歩ませていただく恵みに与っていることを感謝しましょう。

11月9日（木）使徒言行録22章 | 2－16節

12ダマスコにはアナニアという人がいました。律法に従って生活する信仰深い人で、そこに住んでいるすべてのユダヤ人の中で評判の良い人でした。13この人がわたしのところに来て、そばに立ってこう言いました。『兄弟サウル、元どおり見えるようになりなさい。』するとそのとき、わたしはその人が見えるようになったのです。14アナニアは言いました。『わたしたちの先祖の神が、あなたをお選びになった。それは、御心を悟らせ、あの正しい方に会わせて、その口からの声を聞かせるためです。15あなたは、見聞きしたことについて、すべての人に対してその方の証人となる者だからです。16今、何をためらっているのです。立ち上がりなさい。その方の名を唱え、洗礼を受けて罪を洗い清めなさい。』

サウル（パウロ）の悪名はダマスコにいるアナニアにまで届いていました。しかし主に従い出ていき、サウルを兄弟として受け入れ、聖霊に満たされるよう祈り、サウルの目は再び見えるようになり元気を回復します。パウロがキリストの証人としての召命を受けるために、アナニアは伴走者として神さまに遣わされたのです。

11月10日（金）使徒言行録26章16-18節

16起き上がれ。自分の足で立て。わたしがあなたに現れたのは、あなたがわたしを見たこと、そして、これからわたしが示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人にするためである。17わたしは、あなたをこの民と異邦人の中から救い出し、彼らのもとの遣わす。18それは、彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち帰らせ、こうして彼らがわたしへの信仰によって、罪の赦しを得、聖なる者とされた人々と共に恵みの分け前にあずかるようになるためである。』」

樹木にとって最も大切なものは何かと尋ねたら、多くの方は「果実」と答えるそうです。しかし本当に大切なものは「種」です。イエスさまがパウロに出会ってくださり、パウロの心に福音伝道の種を蒔かれたので世界中の人がイエスさまに出会う救いの道へと続く喜びを豊かに実らせることができるのです。

11月11日（土）マタイによる福音書28章16-20節

16さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。17そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。18イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。19だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、20あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

天と地の一切の権限を授かっている、だから安心して行け、行って大胆に福音を宣べ伝えよと主は言われます。そして世の終わりまでいつも私たちと共にいてくださるといふ祝福を約束してくださっています。だから私たちは主の教えを守り、伝え、喜びや悲しみを共有しあい祈り合う共同体を建て上げるという壮大なミッションに主の期待と信頼のうちで臨むことができるのです。



第33課 「新しい希望へ」

聖書箇所：イザヤ書49章1～6節

主題聖句：わたしを裁いてくださるのは主であり

働きに報いてくださるのもわたしの神である。(49:4)

10月は「ぶどう畑」をキーワードとして学んだイザヤ書ですが、11月は「僕（しもべ）」がキーワードとなります。バプテスマ式で歌われる讃美歌「わが君イエスよ」の3節には「神の僕の数に入る/きよきしるしのバプテスマ」という歌詞があります。私たちと神さまの関係を喩える言葉は、親子や、先生と弟子といったものがありますが、「主人と僕」という捉え方もまた、おろそかにできません。

本日の箇所を読んでまず思ったことは、「人の一生のようだ」ということです。28課を担当した時も同じような投げかけをしましたが、今回もイザヤ自身を指している「わたし」や「あなた」という言葉を、ご自身の名前に置き換えて読んで良いかと思えます。

まず、イザヤは「母の胎にある」時から神が自分の名を呼ばれたと語ります。このような実感は、皆様の中にあるでしょうか。まだ自分で何か考えたり、応答したりできる前から神さまが呼んでくださっていたということ。イザヤが強い召命の意識を持っていたというだけでなく、神さまがわたしの人生、わたしという命、その最初から最後まで関り寄り添ってくださる方だという、豊かな信仰が表れています。母の胎にいた時から数えて、何年目に教会に来て、何年目にバプテスマを受けるか。それは人それぞれであり、神さまの決められた時があります。しかし、その「時」がいつだったにせよ、神さまは初めから私たちの名を呼ばれているのです。

イザヤは主によって自分が語る言葉を「鋭い剣」「尖らせた矢」と表現します。神さまからの言葉は、たとえば「ラブレター」と表現されてみたり、「処方箋」「薬」「食事」のように言われてみたり、温かくポジティブな表現の方がよく聞かれると思えます。しかしイザヤがイスラエルの民に様々な警告を伝えたように、時には私たちに痛みを与え、心に巣食う何かを壊すような作用をするのも、御言葉の一つの姿です。聖書教育誌でも、教会で「心地よい言葉」だけが語られていないか、という問いかけがされています。イザヤ書の学びが3か月も続くと知り、預言書に対する厳しいイメージから、ちょっとしんどいぞと思われた方もいるでしょう。しかし私たちが「心地よくない言葉」にも真摯に耳を傾け、受け入れ、そして恐れず人に伝えていこうとする時に、3節にあるように「あなたによってわたしの輝きは現れる」と言っていたにふさわしい、神の僕となれるのです。

4節で、イザヤは疲れを覚えています。預言者としての務めを精いっぱい果たしつつ、これでよかったのだろうか、自分の働きに意味はあったのだろうかと思ってしまう心が読み取れます。主の僕である私たちは、それぞれに与えられた働きがあり、教会で、家庭で、社会の中で、一生懸命にそれに務めています。その中で、ふと自分の歩みを振り返った時に、虚しさを覚え、全く無価値な時間を過ごしてきた、あの時あの道を選べばよかった、と思いつつも悩む経験は誰もありません。そして、いや意味はあったのだ、間違っただけはなかったのだ、と思いたいがあまりに、何か形のあるものを通して自分の歩みを肯定しようと試みる。そんな思いとも人は無縁でいられない、と感じます。

それに対して、イザヤは「わたしを裁いてくださるのは主であり、働きに報いてくださるのもわたしの神である。」と語ります。自分が間違っていたなら裁きが、十分に役目を果たしたならば報いが与えられる、とするその信仰には、どうにか自分で自分を肯定しようという欲が感じられません。間違いか、正しいかも含めて主が教えてくださる、という深い信頼の先には、無理やり「正しかったはずだ」と言い聞かせること以上の平安があるのでしょうか。

そのようにイザヤが考えられるのは、5節に「主の御目にわたしは重んじられている。わたしの神こそ、わたしの力。」とある通り、神さまから大切にされている確信があるからこそです。イザヤは、決して神さまが人間的な意味での「優しさ」だけではなく、「厳しさ」も持った方であることを十分に理解していました。その上で、神さまは本質的に愛に溢れたお方であり、自らにもその愛が注がれていると確信するからこそ、その身を100%神さまに委ねることができたのです。

神がどれだけあなた方を愛しているのか。そしてあなた方はどれほどその愛に背を向けてきたのか。今こそ愛なる神に立ち返りなさい。イザヤは様々な言葉を駆使しながら、イスラエルのためにそうしたことを伝えたかったのではないのでしょうか。

6節には「ヤコブの諸部族を立ち上げらせ/イスラエルの残りの者を連れ帰らせる。」というイザヤの目下の使命が書かれた上で、「だがそれにもまして/わたしはあなたを国々の光とし/わたしの救いを地の果てまで、もたらす者とする。」という壮大な神さまからの委託が示されています。ここの「あなた」を自分の名前に置き換えたら、いよいよ尻込みしてしまいそうです。しかし、たとえ見た目にはイザヤほどのスケール感ではなかったとしても、私たち一人ひとりにも伝道という主からの使命が与えられ、それは必ず「私の救いを地の果てまでもたらす」ことに繋がります。これこそ、私たちの希望です。一人ひとりが良き僕となって、主の御用を担う時、それは決して虚しいものに終わることがないのです。感謝をもって、主に仕えてまいりましょう。

～分かち合い～

- ご自身のこれまでの歩みを、神さまはどうご覧になっていると感じていますか。率直に分かち合ってみましょう。
- 49:5「主の御目にわたしは重んじられている。」と感じた経験はありますか。

11月12日(日) イザヤ書49章1-6節

1 島々よ、わたしに聞け
遠い国々よ、耳を傾けよ。
主は母の胎にあるわたしを呼び
母の腹にあるわたしの名を呼ばれた。
2 わたしの口を鋭い剣として御手の陰に置き
わたしを尖らせた矢として矢筒の中に隠して
3 わたしに言われた
あなたはわたしの僕、イスラエル
あなたによってわたしの輝きは現れる、と。
4 わたしは思った
わたしはいたずらに骨折り
うつろに、空しく、力を使い果たした、と。
しかし、わたしを裁いてくださるのは主であり
働きに報いてくださるのもわたしの神である。

5 主の御目にわたしは重んじられている。
わたしの神こそ、わたしの力。
今や、主は言われる。
ヤコブを御もとに立ち帰らせ
イスラエルを集めるために
母の胎にあったわたしを
御自分の僕として形づくられた主は
6 こう言われる。
わたしはあなたを僕として
ヤコブの諸部族を立ち上がらせ
イスラエルの残りの者を連れ帰らせる。
だがそれにもまして
わたしはあなたを国々の光とし
わたしの救いを地の果てまで、もたらす者とする。

母の胎にいる時にその人をどう用いるかを決めておられる神さま。人の想像を超えています。神さまとイザヤはお互いを信頼し合う主従関係に見えます。神さまとそんな関係になれば嬉しいですね。

11月13日(月) イザヤ書6章8-10節

8 そのとき、わたしは主の御声を聞いた。
「誰を遣わすべきか。
誰が我々に代わって行くだろうか。」
わたしは言った。
「わたしがここにおります。
わたしを遣わしてください。」
9 主は言われた。
「行け、この民に言うがよい
よく聞け、しかし理解するな
よく見よ、しかし悟るな、と。
10 この民の心をかたくなにし
耳を鈍く、目を暗くせよ。
目で見ることなく、耳で聞くことなく
その心で理解することなく
悔い改めていやされることのないために。」

あえてイスラエルの民を頑なにされる神さま。最良のご計画のため、悔い改めの時、癒しの時がまだ先であるからこそその発言なのだ解釈します。先が見えない私たちは何事も早いに越したことはないと考えてしまいがちですね。

11月14日（火）エレミヤ書1章4－8節

4主の言葉がわたしに臨んだ。

5「わたしはあなたを母の胎内に造る前から
あなたを知っていた。

母の胎から生まれる前に

わたしはあなたを聖別し

諸国民の預言者として立てた。」

6わたしは言った。

「ああ、わが主なる神よ

わたしは語る言葉を知りません。

わたしは若者にすぎませんから。」

7しかし、主はわたしに言われた。

「若者にすぎないと言ってはならない。

わたしがあなたを、だれのところへ

遣わそうとも、行って

わたしが命じることをすべて語れ。

8彼らを恐れるな。

わたしがあなたと共にいて

必ず救い出す」と主は言われた

特別に聖別し用いられた者には、それに見合う大きな要求もしてこられます。勿論、しっかりと共にいて下さり守って下さる神さまです。

11月15日（水）ペトロの手紙一 2章9－10節

9しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです。10あなたがたは、

「かつては神の民ではなかったが、

今は神の民であり、

憐れみを受けなかったが、

今は憐れみを受けている」

のです。

「憐れみ」とは「人の苦しみや悲しみに深く同情すること」。似た意味でよく聖書にも出てくる「慈しみ」とは「人に対して深い愛情を抱くこと」。慈しんで下さるだけでなく、イエスさまをこの世に遣わして下さり、私たちが憐れんで下さる神さまです。

11月16日（木）ヨブ記2章9－10節

9彼の妻は、

「どこまでも無垢でいるのですか。神を呪って、死ぬ方がましでしょう」と言ったが、10ヨブは答えた。

「お前まで愚かなことを言うのか。わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただくのではないか。」

このようになって、彼は唇をもって罪を犯すことをしなかった。

神さまに試すことを許されたサタンから受けた、本当に読むだけで辛くなるほどの災難を受けての発言です。「不幸もいただく」という言葉ひとつで神さまが認めている方なのだと分かりますね。「無垢」とは煩悩から離れて汚れのないこと（仏語）。イエスさまが言われた「子供（幼な子）のようにならなければ」と同意であると言えますね。

11月17日（金）ヨブ記16章18-22節

18大地よ、わたしの血を覆うな
わたしの叫びを閉じ込めるな。
19このような時にも、見よ
天にはわたしのために証人があり
高い天には
わたしを弁護してくださる方がある。
20わたしのために執り成す方、わたしの友
神を仰いでわたしの目は涙を流す。
21人とその友の間を裁くように
神が御自分とこの男の間を裁いてくださるように。
22僅かな年月がたてば
わたしは帰らぬ旅路に就くのだから。

ヨブがサタンからの試練に苦しみ、悲しんでいる時に来てくれた友人達が、励ましから、段々と罪の追求へと変わってきた状況での言葉です。悲しみや友人への不満を持ちつつも、それでも主への信仰を保ち続ける姿勢が言葉に現れています。

11月18日（土）ヤコブの手紙5章7-11節

7兄弟たち、主が来られるときまで忍耐しなさい。農夫は、秋の雨と春の雨が降るまで忍耐しながら、大地の尊い実りを待つのです。8あなたがたも忍耐しなさい。心を固く保ちなさい。主が来られる時が迫っているからです。9兄弟たち、裁きを受けないようにするためには、互いに不平を言わぬことです。裁く方が戸口に立っておられます。10兄弟たち、主の名によって語った預言者たちを、辛抱と忍耐の模範としなさい。11忍耐した人たちは幸せだと、わたしたちは思います。あなたがたは、ヨブの忍耐について聞き、主が最後にどのようにして下さったかを知っています。主は慈しみ深く、憐れみに満ちた方だからです。

イエスさまを信じ、従うことが異端扱いされていた当時では忍耐が必要であったからこそその言葉です。ただヨブの忍耐を例えとして出す程の忍耐が求められる状況であったとすると相当に厳しい現状であったと想像出来ます。



第34課 「神に聞き従う」

聖書箇所：イザヤ書50章4～11節

主題聖句：闇の中を歩くときも、光のないときも（50：10）

今回の聖書箇所50章4節から11節は、「第三の僕の歌」と言われている箇所です。「第一の僕の歌」は42章1節から9節、「第二の僕の歌」は49章1節から13節、「第四の僕の歌」は52章13節から53章12節とされています。この「僕の歌」とは、第二イザヤと呼ばれる40章以降に、バビロン捕囚からの解放の喜びを告げる部分に書かれています。「第三の僕の歌」のここでの僕は、イスラエルに多く登場した主の預言者たちで、迫害に合い、時の為政者や民衆に苦しめられた忍耐の姿が描かれています。

4節から5節は全体として、主の僕が主に聞き従い、弟子として語る様子を描いています。そしてその内容は個人的な信頼と確信であると言えるでしょう。しかし一変して6節では、その僕が受けたであろう屈辱的な迫害と、嘆きを叙述しています。何者による迫害であるのかは、5節後半が示唆しています。僕は神の教えに「逆らわず」、祖国への帰還の途から「退かなかった」とあるように、そのこと故に、帰還に反対した同胞からの迫害を受けたと考えることができます。なぜ帰還をせずに、バビロンに残ることを選択した者がいたのでしょうか。長きに亘る捕囚に疲れ果て無気力となったと考えられます。そういう環境の中でユダヤ教の礼拝を捧げるという形骸化が進み、捕囚の長期化とイスラエルの人々の世代交代に伴い、エルサレムへの帰還の諦めと、望まない人々が増えていったと考えられます。しかし、7節で語られているように、僕は迫害には屈しない姿を示します。7節以降、主に対する信頼と嘆きが交差しますが、そこに表れるのは自己の無実を主張する訴えでもあり、主の御言葉を伝える預言者としての嘆きであり信頼と言えるでしょう。

8節から9節で、僕は勝訴を確信していることが窺える内容を語ります。神の裁判の前に「共に立とう」と呼びかけ、神が僕の正しさを認め、共に闘ってくださり、そして「主なる神が助けてくださる」と主を信頼します。出バビロンを、第二の出エジプトとみなしていた僕＝第二イザヤは、モーセに反逆したコラ・ダダン・アビラムのように（民数記16章）、僕を迫害する反対派には神の裁きが下ることを連想していたと思われます。9節後半「見よ、彼らはすべて衣のように朽ち、しみに食い尽くされるであろう。」（しみとは、紙や布を食う虫）の呪詛の言葉は、激しい対立を背景とした僕の心の叫びとして吐露されたものと思われます。

10節11節に行く前に、もう少し4節から読んでいきたいと思えます。4節5節7節で「主なる神」と呼びかけています。ここでの「神」は固有名詞の「神」であり、「僕」である自分との関係を明らかにし、この方こそ自分にとっての「主」であるという表現になっています。創造主である「主」と被造物である自分との関係であるにもかかわらず、「交わりの確かさ」が示され「主の僕」としての拠り所が明確に表されています。4節の「弟子」ですが、これは僕自らが自分を「主なる神の弟子」と呼ぶことで、更に独自の関係を提示しています。創造主「神」と被造物「人」の不思議な「人格的親（ちか）しさ」が込められています。そして、神の弟子であるということが、この僕の預言者としての支えとなっています。

「舌をわたしに与え」「言葉を呼び覚まし」は、語ることも聞くこともすべてが主から出ている状態であることを指します。この弟子は、朝ごとに「主」から聴き、「主」は朝ごとに語ることを弟子に与えます。そして「聞き従うようにしてくださる。」とあるように、主からの語りかけに、聴従しています。

「疲れた人を励ますように」の原文訳は、「疲れた者を言葉をもって支えることを知るために」となります。これは、新約聖書ヨハネによる福音書1章1節の「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。」や「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」（マタイ4：4）にあるように、私たち人間は「神の御言葉」によって生かされ支えられていることを表していると言えるでしょう。

5節後半の「わたしは逆らわず、退かなかった。」は6節に続く大切な1行となります。6節は僕に代表されるイスラエルの民の実体験です。敵対する者から受ける激しい暴力と非難と侮辱です。ただし、敵対する者の正体は具体的には書かれていません。第二イザヤの呼びかけに応えることのなかった、帰還に反対したイスラエルの同胞たちでしょうか。6節のような体験は詩編の嘆きの歌にも出てきますが、詩編の嘆きに比べると抑えられた表現になっています。それは、ここでの苦難は、この苦難を受ける側が「納得し、受け入れている」からです。そしてここでの嘆きは、エレミヤの嘆きに繋がると言われています。「顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた。」は、原文訳は「侮辱と唾から顔を隠さなかった。」となります。ここでの僕は、神の教えに従い、時の為政者に逆らう行為をしなかったにもかかわらず、罪人か愚か者であるかのように打たれ、ひげを抜かれ顔に唾されました。これは最大の侮辱行為でありました。そしてこの箇所は、新約聖書の有名な御言葉にと受け継がれた箇所となります。マタイ5：39「悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。」、マタイ26：67「イエスの顔に唾を吐きかけ、こぶしで殴り、ある者は平手で打ちながら」（他、マルコ10：34、ルカ6：29、18：32）

7節の「主なる神が助けてくださるから」の語尾の「から」は、6節での屈辱を受けてもなお、僕は神を信頼し、今受けている苦難が神の御意思から出たもので、その御心に従い「受け入れる」ことが、神の祝福により近い招きへの応答であるとの言葉に込めています。一見相反する内容ですが、僕は神の御心の間で耐え、そして神の御心を悟ります。

8節から9節では、僕による法廷用語が出てきます。法廷用語も第二イザヤの特徴と言われています。僕は敵対者から「訴え」られています。そして「罪に定め」られています。僕の敗北が決着しているように思われますが、しかし9節の最後の2行で敵対者の敗北と消滅を予測します。このような僕の確信がどこから来るのか、それは「主なる神」を信頼する強い信仰心に他ならないと思われます。そして8節は、ローマの信徒への手紙8章33節「だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義としてくださるのは神なのです。」に受け継がれ、9節は、ヘブライ人への手紙1章11節「これらのものは、やがて滅びる。だが、あなたはいつまでも生きている。すべてのものは、衣のように古び廃れる。」にと受け継がれます。

10節から11節は、「お前たち」の不信仰と「主の僕」の信仰が対比の形で書かれています。4節から9節の内容と絡み合わせて解釈するならば、神の御意思に聴き従い、幾多の苦難に遭おうとも御意思に従い帰還の途につく僕と、その事に反対する者たちの対比です。反対する者たちの持つ「火」「松明」が異神の祭壇に捧げる火か、僕に仕掛ける攻撃の火かはわかりませんが、いずれにせよその「火」は、主によるものではなく、自らの道を照らす手段であり、結果彼らは道を間違え迷い「苦悩のうちに横たわる」最後を迎えます。11節の「わたし」は主御自身を指すものと考えるのが望ましいとされています。

火は神の審判によく用いられます。そして火は浄化の象徴でもあります。光は希望と真実、闇は罰と災いを表します。旧約で預言されたことは新約へと受け継がれ、現代に生きる私たちへと届けられます。世界中の至る所で攻撃と報復の応酬が繰り返されています。イエスさまは、その中で生きる人々の嘆きの祈りの声に応えてくださっています。そして、平和な中にある孤独には、希望の光を等しく照らしてくださっています。キリスト者として、真実の祈りをお捧げする者でありたいと切に願います。

～分かち合い～

- 日々の祈りの中で小さな希望を持ち続けていますか。

11月19日（日）イザヤ書50章4-11節

4主なる神は、弟子としての舌をわたしに与え
疲れた人を励ますように
言葉を呼び覚ましてくださる。
朝ごとにわたしの耳を呼び覚まし
弟子として聞き従うようにしてくださる。
5主なる神はわたしの耳を開かれた。
わたしは逆らわず、退かなかった。
6打とうとする者には背中をまかせ
ひげを抜こうとする者には頬をまかせた。
顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた。
7主なる神が助けてくださるから
わたしはそれを嘲りとは思わない。
わたしは顔を硬い石のようにする。
わたしは知っている
わたしが辱められることはない、と。
8わたしの正しさを認める方は近くなります。
誰がわたしと共に争ってくれるのか

われわれは共に立とう。
誰がわたしを訴えるのか
わたしに向かって来るがよい。
9見よ、主なる神が助けてくださる。
誰がわたしを罪に定めよう。
見よ、彼らはすべて衣のように朽ち
しみに食い尽くされるであろう。
10お前たちのうちにいるであろうか
主を恐れ、主の僕の声に聞き従う者が。
闇の中を歩くときも、光のないときも
主の御名に信頼し、その神を支えとする者が。
11見よ、お前たちはそれぞれ、火をともし
松明を掲げている。
行け、自分の火の光に頼って
自分で燃やす松明によって。
わたしの手がこのことをお前たちに定めた。
お前たちは苦悩のうちに横たわるであろう。

イザヤは、語るべき言葉を主から賜ったので「わたしは逆らわず退きもしなかつた。」と不退転の姿勢です。又神さまのメッセージを語る時に、不信者から迫害や最大の侮辱を受けるが「主なる神が助けてくださるから 私はそれを嘲とは思わない。」と語るイザヤ、私たちは弱く小さな者ですが主から力と励ましをいただいて、賜物によって大胆に、或いは肅々とみ言葉を語らせていただければ光栄です。

11月20日（月）エレミヤ書5章1-3節

1エルサレムの通りを巡り
よく見て、悟るがよい。
広場で尋ねてみよ、ひとりでもいるか
正義を行い、真実を求める者が。
いれば、わたしはエルサレムを赦そう。
2「主は生きておられる」と言って誓う
からこそ
彼らの誓いは偽りの誓いとなるのだ。

3主よ、御目は
真実を求めておられるではありませんか。
彼らを打たれても、彼らは痛みを覚えず
彼らを打ちのめされても
彼らは懲らしめを受け入れず
その顔を岩よりも固くして
立ち帰ることを拒みました。

エルサレム中探してみたが、真実を求める者は一人も居なかつた。懲らしめやさばきの災が身に及べば、気付いて悔い改めて主の元に立ち帰ってくれるだろうと思われたが！・・・今既に主は清い血を代価として私たちの罪を贖って下さいました。そして「私の元に来て安らぎなさい。荷を下ろしなさい。」と優しく語りかけて下さいます。試みに合わずとも素直に「主よ、信じます。」と告白する者になりたいです。

11月21日（火）ローマの信徒への手紙8章26-30節

26同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。27人の心を見抜く方は、“霊”の思いが何であるかを知っておられます。“霊”は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです。28神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということ、わたしたちは知っています。29神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たもののようにとあらかじめ定められました。それは、御子が多くの兄弟の中で長子となられるためです。30神はあらかじめ定められた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、義とされた者たちに栄光をお与えになったのです。

「“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって取り成してくださるからです。」「御計画に従って召された者たちには、万事が益(善)となるように共に働く・・・」神さまのみ心にかなったものとなるように、神さまは共に働いてくださる。大好きな箇所で、今までどれだけこのみ言葉で励まされ慰められてきたことでしょうか。そしてどれだけ平安を与えていただいたことでしょうか。深く感謝いたします。

11月22日（水）ローマの信徒への手紙8章31-39節

31では、これらのことについて何と言ったらよいだろうか。もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。32わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。33だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょうか。人を義としてくださるのは神なのです。34だれがわたしたちを罪に定めることができますでしょうか。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです。35だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができますでしょうか。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。

36「わたしたちは、あなたのために
一日中死にさらされ、
屠られる羊のように見られている」

と書いてあるとおりです。37しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。38わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、39高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。

神さまにとって、そのひとり子を人間の罪のために十字架につけることは耐えられないほどのお苦しみでしたのに、神さまは私達たちのために、御子をも惜しまないで見放されました。神さまの私達への絶対の愛です。神さまはそれほどまでに私達を愛しておられるので、御子と一緒に全てのものを恵みをもって与えてくださる。これはパウロの告白の言葉ですが、私たちも同じように信仰告白させていただきます。アーメン。

11月23日（木）イザヤ書7章1-9節

1ユダの王ウジヤの孫であり、ヨタムの子であるアハズの治世のことである。アラムの王レツインとレマルヤの子、イスラエルの王ペカが、エルサレムを攻めるため上って来たが、攻撃を仕掛けることはできなかった。2しかし、アラムがエフライムと同盟したという知らせは、ダビデの家に伝えられ、王の心も民の心も、森の木々が風に揺れ動くように動揺した。

3主はイザヤに言われた。

「あなたは息子のシェアル・ヤシュブと共に出て行って、布さらしの野に至る大通りに浴う、上貯水池からの水路の外れでアハズに会い、4彼に言いなさい。落ち着いて、静かにしていなさい。恐れることはない。アラムを率いるレツインとレマルヤの子が激しても、この二つの燃え残ってくすぶる切り株のゆえに心を弱くしてはならない。5アラムがエフライムとレマルヤの子を語らって、あなたに対して災いを謀り、6『ユダに攻め上って脅かし、我々に従わせ、タベアルの子をそこに王として即位させよう』と言っているが、7主なる神はこう言われる。それは実現せず、成就しない。

8アラムの頭はダマスコ、ダマスコの頭はレツイン。

（六十五年たてばエフライムの民は消滅する）

9エフライムの頭はサマリア

サマリアの頭はレマルヤの子。

信じなければ、あなたがたは確かにされない。」

同盟軍がせめてくるかも！と危機的状況にアハズ王は酷く動揺しました。主はイザヤを通して王に「落ち着いて静かにしていなさい。恐れることはない。」と言われます。「心ひるむな。恐れるな。慌てるな。」申命記20:3「うろたえてはならない。おののいてはならない。」ヨシユア1:9等、私はとても弱いですが、「私が共にいるから恐れないように」といつも励まして下さる主に感謝いたします。

11月24日（金）申命記31章5-6節

5主が彼らをあなたたちに引き渡されるから、わたしが命じたすべての戒めに従って彼らに行いなさい。6強く、また雄々しくあれ。恐れてはならない。彼らのゆえにうろたえてはならない。あなたの神、主は、あなたと共に歩まれる。あなたを見放すことも、見捨てられることもない。」

主はイスラエルの民が約束の地カナンに入る時にリーダーとなるのは、あれだけ奮闘したモーセではなくヨシユアであると言われました。モーセは乳と蜜の流れる地に入れないと宣告されて、とてもショックでしたでしょうが、神さまの業の成就のために「恐れてはならない。・・・」とヨシユアを最高の言葉で励まして主の業を引き継ぎます。私欲ではなく完全に主の言葉に従順に歩まれたモーセの姿に胸が篤くなります。

5一生の間、あなたの行く手に立ちはだかる者はないであろう。わたしはモーセと共にいたように、あなたと共にいる。あなたを見放すことも、見捨てることもない。6強く、雄々しくあれ。あなたは、わたしが先祖たちに与えると誓った土地を、この民に継がせる者である。7ただ、強く、大いに雄々しくあって、わたしの僕モーセが命じた律法をすべて忠実に守り、右にも左にもそれではならない。そうすれば、あなたはどこに行っても成功する。8この律法の書をあなたの口から離すことなく、昼も夜も口ずさみ、そこに書かれていることをすべて忠実に守りなさい。そうすれば、あなたは、その行く先々で栄え、成功する。9わたしは、強く雄々しくあれと命じたではないか。うろたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる。」

「あなたたちの足の裏が踏む所すべてあなたたちに与える。」「一生の間、あなたの行手に立ちはだかる者はない。」「あなたと共にいる。あなたを見放すことも、見捨てることもしない。」「・・・、あなたはどこに行っても成功する。」「・・・、その行く先々で栄え、成功する。」このらの言葉のたった一つでも飛び上がる程嬉しいものですが、その言葉の全てを信じ受け入れて行動に移したヨシュアの信仰にハレルヤです。

第35課 「苦難を負う僕」

聖書箇所：イザヤ書53章1～8節

主題聖句：彼が刺し貫かれたのはわたしたちの背きのためであり 彼が打ち砕かれたのはわたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによってわたしたちに平和が与えられ 彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。(53:5)

来週からいよいよ待降節(アドヴェント)となります。私たちの救い主イエス・キリストのご降誕を喜び祝う日が近づいて来ました。それに先立ち今週の聖書教育誌の週題は「苦難を負う僕」です。イザヤ書52章13節から53章の「主の僕の苦難と死」から聴いてまいります。

はじめに聖書からは離れますが、この聖書箇所に結び付くと思わされていることを分かち合いたいと示されました。私は教会の10月に行われた長崎の五島列島・福江島にある五島キリスト教会の伝道チームに加えていただきました。私にとって五島を訪ねるもうひとつの目的は潜伏キリシタンの方々の足跡を訪ねることでした。

1567年に五島にキリスト教が伝えられ、当初は好意的で19代領主も受洗し、司祭(パードレ)も迎えられましたが領主の死後(1579年)、あとを継いだ20代領主は迫害を始めました。1587年の豊臣秀吉よるキリシタン禁教令、長崎・西坂おいての26人の殉教(1597年)が続き、22代領主になると迫害はさらに強めて五島へのキリシタン入島禁止の高札(1628年)が立てられることとなります。島原の乱(1638年)のあとには踏み絵による宗門改め(1664年)も行われ始めました。ついには五島のキリシタンの人々に司祭不在となり信仰組織も含めて18世紀後半には、ほぼ消滅したと言われています。映画「沈黙」は1640年代の長崎・外海と五島列島(上五島・下五島)を舞台としています。

しかし、この後、長崎の大村藩の潜伏キリシタンの追放と福江の五島藩の凶作・飢餓による農民不足という互いの利害が一致して1797年から五島への農民移住が始まり、そのほとんどが潜伏キリシタンだったと言われています。その数3000名ほどが移り住むようになりました。移住した先は山間僻地のやせた土地であり、漁業に不便な急峻な地形の海辺でした。移住した人々は表向きには仏教徒を装いながら、苛烈な労苦を耐えて信仰を代々継承していったのです。1865年長崎の浦上の潜伏キリシタンの人たちが大浦天主堂のプチジャン神父の元を訪ね「信徒発見」の奇跡として世界中に伝わりました。五島堂崎の信徒も1867年に密かにプチジャン神父のもとを訪ねますが、未だ禁教下の日本ではキリシタンとわかれば死罪・流刑を含む激しい弾圧にさらされたのです。五島でも1868年(明治元年)に久賀島で「五島崩れ」と呼ばれる弾圧がありました。狭い12畳ほどの民家を牢に仕立てて老人・乳幼児含めた男女200名あまりが8カ月もの間、押し込まれ42名の信徒が命を落とされました。この棄教を強いる悲惨な弾圧が各地で起きたことは世界が知ることになり欧米列強は激しく抗議・非難した結果、明治政府は1873年にやむなくキリシタン禁教礼の撤去を布告したのです。ようやくキリスト信仰の自由が獲得できたのです。300年あまり続いた禁教の時代がついに終わったのです。

その後、各地の潜伏キリシタンの人たちは正式にカトリックに加えられましたが、それを拒んだ人たちは隠れキリシタンとして独自の歩みをしています。五島においても明治・大正期にカトリックの神父をお迎えして続々とカトリックの集落に教会堂を建てていきました。これらの教会は貧しい暮らしのはずの人たちであったのに私財を惜しみなく捧げ、自分たちで石を積み、地元で材料を集め工夫を重ねて神父の故郷であるヨーロッパの教会を模して見事な教会堂を各地に建て上げました。五島の島々の教会は今も人々の大切な祈りの場となっています。

その五島・福江島にプロテスタントの教会としてただひとつ立つのが五島キリスト教会なのです。

聖書に戻ります。イザヤ書40章からは神のイスラエルの民の救いについての回復の希望と将来の贖罪に焦点が当てられています。

イザヤ42:1 見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。

「わたしの僕」と神が言われたのはイスラエルのことです。大国の狭間で弱小のイスラエルは翻弄され神の主権を認めず、人間中心に自分勝手に背く誤った行為を繰り返し神の裁きにより荒廃していきます。

43:2～3 水の中を通るときも、わたしはあなたと共にいる。大河の中を通っても、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、焼かれず 炎はあなたに燃えつかない。わたしは主、あなたの神イスラエルの聖なる神、あなたの救い主。

それでも主なる神に信頼して耐え忍んだイスラエルが「苦難の僕」と呼ばれるのは、裁きや迫害の時代から忠実な残りの民が起こされてきたからです。神は火の中でも、水の中でも彼らと共におられて小さくなったイスラエルを再び強く回復されるのです。キリシタンの人々も現代のキリスト者もイスラエルです。新しいイスラエルなのです。この回復の尊い証しのひとつが五島の地なのです。

ヨハネ16:33 これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。

イザヤはここから「苦難の僕」であるイスラエルを救い、異邦人の光となるために一人の全き人が「苦難を負う僕」として来られると告げます。彼はすべての民の贖罪と救いを実現し、弱き人々のために召し出されると告げるのです。

この53章1～8節はイエス・キリストの受苦の場面にぴったりと符合します。預言者イザヤは彼の生きた時代からバビロン捕囚の解放、イエス・キリストの贖罪と救い、異邦人を新しいイスラエルに迎えるまでの世界を神の御旨により実現してゆくこと啓示され私たちに告げ知らせているのです。すなわち、イザヤの預言はイエス・キリストに向かって集中・結実していくのです。

キリストの福音はこのイザヤ書53章でも語られます。
私たちはいつの時も悔い改め告白する罪ある者です。

53:6 わたしたちは羊の群れ 道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて主は彼に負わせられた。

53:5 わたしたちに平和が与えられ 彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。

この恵みの告白こそは「キリストの福音」の真髄なのです。

～分かち合い～

- イエスさまの福音に初めてふれた時の喜びを思い起こしてみましよう。

11月26日(日) イザヤ書53章1-8節

1わたしたちの聞いたことを、誰が信じようか。

主は御腕の力を誰に示されたことがあるか。

2乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように

この人は主の前に育った。

見るべき面影はなく

輝かしい風格も、好ましい容姿もない。

3彼は軽蔑され、人々に見捨てられ

多くの痛みを負い、病を知っている。

彼はわたしたちに顔を隠し

わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。

4彼が担ったのはわたしたちの病

彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに

わたしたちは思っていた

神の手にかかり、打たれたから

彼は苦しんでいるのだ、と。

5彼が刺し貫かれたのは

わたしたちの背きのためであり

彼が打ち碎かれたのは

わたしたちの咎のためであった。

彼の受けた懲らしめによって

わたしたちに平和が与えられ

彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。

6わたしたちは羊の群れ

道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。

そのわたしたちの罪をすべて

主は彼に負わせられた。

7苦役を課せられて、かがみ込み

彼は口を開かなかった。

屠り場に引かれる小羊のように

毛を刈る者の前に物を言わない羊のように

彼は口を開かなかった。

8捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。

彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか

わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり

命ある者の地から断たれたことを。

イエスさまがお生まれになる700年以上も前に記述されたイザヤ書53章が、新約聖書に書かれた十字架での処刑状況と殆ど同じ様に記述しているのは、イザヤが卓越した預言者であるからでしょうか。この十字架刑を経てイエスさまの説く神の愛が、その後全世界へ広まりました。

11月27日(月) ルカによる福音書1章47-55節

47わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。

48身分の低い、この主のはしためにも

目を留めてくださったからです。

今から後、いつの世の人も

わたしを幸いな者と言うでしょう、

49力ある方が、

わたしに偉大なことをなさいましたから。

その御名は尊く、

50その憐れみは代々に限りなく、

主を畏れる者に及びます。

51主はその腕で力を振るい、

思い上がる者を打ち散らし、

52権力ある者をその座から引き降ろし、

身分の低い者を高く上げ、

53飢えた人を良い物で満たし、

富める者を空腹のまま追い返されます。

54その僕イスラエルを受け入れて、
憐れみをお忘れになりません、
55わたしたちの先祖におっしゃったとおり、
アブラハムとその子孫に対してとこしえに。」

日本に住んでいる我々が、外国人を差別する事は許されません。教育に差があってはなりません。その国の繁栄は平均的教育水準の高さにあります。

11月28日（火）ルカによる福音書 | 章68－80節

68「ほめたたえよ、イスラエルの神である主を。
主はその民を訪れて解放し、
69我らのために救いの角を、
僕ダビデの家から起こされた。
70昔から聖なる預言者たちの口を通して
語られたとおりに。
71それは、我らの敵、
すべて我らを憎む者の手からの救い。
72主は我らの先祖を憐れみ、
その聖なる契約を覚えていてくださる。
73これは我らの父アブラハムに立てられた誓い。
こうして我らは、
74敵の手から救われ、
恐れなく主に仕える、
75生涯、主の御前に清く正しく。
76幼子よ、お前はいと高き方の預言者と呼ばれる。
主に先立って行き、その道を整え、
77主の民に罪の赦しによる救いを
知らせるからである。
78これは我らの神の憐れみの心による。
この憐れみによって、
高い所からあけぼのの光が我らを訪れ、
79暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、
我らの歩みを平和の道に導く。」
80幼子は身も心も健やかに育ち、イスラエルの人々の前に現れるまで荒れ野にいた。

約束を守れない時は、事前に口頭で相手にお詫びと変更を伝えれば済む事が多いです。
しかし契約となると、違反した時には賠償の義務が生じます。私達クリスチャンはバプテスマ
に依って、神と個人的に契約を結んでいます。この契約に忠実に生きることが求められています。

11月29日（水）ルカによる福音書2章29-32節

29「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり
この僕を安らかに去らせてくださいます。
30わたしはこの目であなたの救いを見たからです。
31これは万民のために整えてくださった救いで、
32異邦人を照らす啓示の光、
あなたの民イスラエルの誉れです。」

律法を守れと言った預言者は数多く出現した。神の愛が最も貴いと説いて、十字架刑に処せられたイエス・キリストは預言者でなく、神の子に高められた。

11月30日（木）マタイによる福音書4章4-7節

4イエスはお答えになった。
「『人はパンだけで生きるものではない。
神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』
と書いてある。」5次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、6言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。
『神があなたのために天使たちに命じると、
あなたの足が石に打ち当たることのないように、
天使たちは手であなたを支える』
と書いてある。」7イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われた。

気の遠くなるような年月を掛けて、練りに練られて記録された神の言葉である聖書は、理解に苦しむ箇所が多いけれども、牧師やクリスチャン仲間と共に学ばなければなりません。

12月1日（金）コリントの信徒への手紙一1章22-25節

22ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、23わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、24ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。25神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。

イエス様は初めの頃、幾つもの奇跡と云うしるしを示されたが、後半には奇跡を行われなくなった。目に見えるしるしでなく、目に見えない愛を解らせようとしてしました。11人の弟子達は十字架刑の後にイエスの愛を理解し、その愛を宣べ伝えました。

1 2月2日（土）イザヤ書7章1－9節

1ユダの王ウジヤの孫であり、ヨタムの子であるアハズの治世のことである。アラムの王レツインとレマルヤの子、イスラエルの王ペカが、エルサレムを攻めるため上って来たが、攻撃を仕掛けることはできなかった。2しかし、アラムがエフライムと同盟したという知らせは、ダビデの家に伝えられ、王の心も民の心も、森の木々が風に揺れ動くように動揺した。

3主はイザヤに言われた。

「あなたは息子のシェアル・ヤシュブと共に出て行って、布さらしの野に至る大通りに浴う、上貯水池からの水路の外れでアハズに会い、4彼に言いなさい。落ち着いて、静かにしていなさい。恐れることはない。アラムを率いるレツインとレマルヤの子が激しても、この二つの燃え残ってくすぶる切り株のゆえに心を弱くしてはならない。5アラムがエフライムとレマルヤの子を語らって、あなたに対して災いを謀り、6『ユダに攻め上って脅かし、我々に従わせ、タベアルの子をそこに王として即位させよう』と言っているが、7主なる神はこう言われる。それは実現せず、成就しない。

8アラムの頭はダマスコ、ダマスコの頭はレツイン。

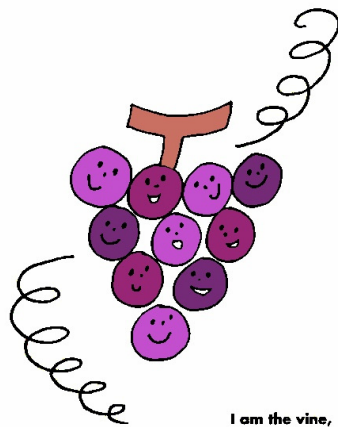
（六十五年たてばエフライムの民は消滅する）

9エフライムの頭はサマリア

サマリアの頭はレマルヤの子。

信じなければ、あなたがたは確かにされない。」

BC740年頃、アラム王・レツインとイスラエル北王国・ペカ王がユダ王国のエルサレムを攻めて来た時、預言者・イザヤはユダ王国最悪の王と云われた第12代アハズ王を諫めたが、アハズ王は聞き入れなかった。



I am the vine,
you are the branches
John 15:5

2023.11 成人科